

個人的価値と社会・文化的価値

— 行為理論における価値志向の概念

丸 山 哲 央*

Personal Values and Socio-Cultural Values

— The Concept of Value-Orientation

in the Theory of Action.

Maruyama, T.

(はじめに)

マックス=ウェーバーは、人間の社会的行為を分析し行為の四類型——目的合理的、価値合理的、感動的、そして伝統的——を設定した。彼はこの人間行為の最も基本的な四つの型を基礎にして、様々の社会形態へと言及するのである。¹⁾なぜなら、社会の諸形態は個々の人間行為者によってつくられており、従ってそれは個々の人の志向の型の凝集であるとも考えられるからである。このような観点からみれば、社会的行為はウェーバーの社会学理論の出発点をなすものといえるであろう。

ところで、パーソンズ, T.らの行為の総合理論 (General Theory of Action) は、人間の社会的行為の関係枠を設け、そこから個人、社会そして文化の相互関係を追求せんとするものであった。パーソンズらのこの行為理論において、価値志向の概念は、パーソナリティ、社会体系そして文化という三つの体系を貫ぬいてこれらを接合するところの戦略概念として描かれている。即ち、特定社会の構造的特徴は、そこに制度化されている役割期待の型に求めることが出来るが、それは社会成員の相互作用の仕方が定型化したものと考えられる。社会成員の相互作用の仕方とは、彼らの行う特定の選択的志向の型の中に求められる。そして、人間の選択的方向を決定するのは彼の抱く価値であるから、その意味で価値志向の型は相互作用の仕方、即ち社会の構造的特徴を表わすものとされるのである。

一方、この行為の総合理論の共同研究の一環として、クラックホーン, C.は「行為理論における価値と価値志向」(‘Values and Value-Orientations in the Theory of Action’)という論文を提出した。彼の論文が

載せられているのは、パーソンズらの「行為の総合理論をめざして」(‘Toward a General Theory of Action’)の後半部においてであり、かつ彼自身の論文の題名も、‘in the Theory of Action’とうたっている。しかし、彼は‘Toward a General Theory of Action’を社会学に属する書であるとしておりながら、その中の自身の論文、Values and Value-Orientations in the Theory of Action’を人類学の範疇に入れている。²⁾このことから、彼の価値論が行為理論と文化人類学との二つの視点の総合的立場から論ぜられていることがわかる。これは、価値の概念が個人か社会・文化かといった——即ちミクロかマクロかといった——どちらか一方の極に限定したのでは、十分に解明することが出来ないということによるものである。クラックホーン, C.はこの価値論において、文化の中心的原理を価値という言葉で置換え文化の一要素としての価値を個人や社会の中に位置づけたのである。³⁾

価値、価値志向の概念が「橋渡しの概念」(bridging concept)であるといわれるのは、これがミクロとマクロの接合理論において欠くべからざる要素として作用しているからでもある。本稿においては、価値の概念の持つミクロとマクロの bridging という可能性を、個人的価値と社会・文化体系の価値の相互関連性という観点から、パーソンズらの行為理論を手掛りに検討してゆきたい。

〔註〕

- 1) Weber, M., Soziologische Grundbegriffe, 阿 閑吉男他訳「社会学の基礎概念」
- 2) Albert, E. M. and Kluckhohn, C.; A Selected Bibliography on Value, Ethics, and Esthetics—in the Behavioral Science and

* 宇部工業高等専門学校社会教室

Philosophy, 1920—1958, p. 63.

3) Belshaw, C. S.; "The Identification of Values in Anthropology", A. J. S. vol. 64, 1959. p. 557

1) クラックホーン, C. の価値定義においては, 個人と集団という2つの価値主体が設定されている。¹⁾ 彼は又価値の広がり (extent) の程度によって, 特異的価値 (idiosyncratic value), 個人的価値 (personal value), 集団的価値 (group value), そして普遍的価値 (universal value) という価値分類を行っている。²⁾ 特異的価値は, 集団内の特定の人間によって抱かれた価値で, 新しい価値の創造源になると考えられる。個人的価値とは, 特定の集団的価値や普遍的価値が個人の機能的条件の下に私的に解釈されたものである。体系としての個人 (パーソナリティ) も社会も夫々の機能的な要請に従って統合されている。個人的価値は主として個人的な動機の問題をめぐって構成されているが, 集団的価値の多くは人間の相互行為を律する規範型に関係した価値である。従って, 個人的な動機に社会関係が入り込むところに集団的価値と個人的価値の接点を見出すことが出来るといえよう。普遍的価値は, 文化的な相違を超越した人類に共通とされる価値である。クラックホーン, C. は, ベネディクト (Benedict, P.) 等の文化相対論の立場に反対して, 普遍的価値の存在を主張している。³⁾

ところで, 個人的価値と集団的価値の接合する拠点を示す概念として, クラックホーン, C. が規定する価値志向 (value-orientation) の概念が考えられる。クラックホーン, C. によれば, 価値志向は, (a) 一般的であり, (b) 組織だてられており, (c) 明確に実在的判断を含むところの価値の概念である。⁴⁾ value-orientation という語から, それは価値へ向う基本的な態度を示す概念とも解されよう。即ち, 個人も集団も, 自己を取まいている宇宙の構造や, 宇宙や自然との人間の関係や, 人間同志の関係について基本的な見解ないしは定義といったものを有している。生活状況に対する一般的な定義は, 規範的, 審美的命題以上の実在的命題を含んでいる。規範的命題と実在的命題とは本来相互依存的である。「あるべきもの」は通常物事の本性と信じられているものに密接に関係しているが, 一方で「現にあるもの」についての信念はしばしば「あるべきもの」が変装した仮定である。さらに集団の諸価値は制度化されて内面化されると, 個人にとっては一種の事実上の現実となる。このような規範的, 審美的要素と実在的要素とを統一した生活の意味

についての基本的見解を示す概念が, 価値志向だというのである。

クラックホーン, C. は, 価値志向を「自然に関する, 自然における人間の位置に関する, 人間の人間に対する関係に関する, そして人間環境と社会関係にかかわる望ましいものと望ましくないものに関する, 行為に影響を与えるところの一般化され組織化された概念」と定義する。⁵⁾ 従って集団の価値志向は, 特定集団の有する基本的な価値原理である。その集団の成員はこれを内面化し, その基本前提にもとづいた行為様式, 思考方法によって他の集団に属する人々との間に差違を生ずるのである。

2) パーソンズらの行為理論において文化の諸要素は, 認知的記号の体系 (systems of cognitive symbols), 表現的記号の体系 (systems of expressive symbols), 評価的記号の体系 (systems of evaluative symbols) に分類されているが, このうち評価的記号の体系は価値志向の諸基準といわれるものである。⁶⁾ 後に述べるように, この価値志向の基準はさらに認知的, 鑑賞的, 道徳的の諸基準に分れるのである。この際に, 評価的基準 (価値志向の基準) とは評価の仕方についての基準, 即ち「どのような価値に心を向るべきか」ということについての基準であると考えられる。この文化の中に型として統合されている価値志向の基準は, 行為主体の動機志向とならぶ価値志向と対応しているのである。そして文化の価値志向の型は, 内面化されてパーソナリティの欲求性向 (need-disposition) の一部となり, 又社会体系に内面化されたときには, それは社会の制度化された役割期待 (role-expectation) として作用する。従ってパーソンズの行為理論において, 価値志向の概念は文化, 社会体系そしてパーソナリティの三つの体系を通してこれらを接合する重要な概念として用いられているといえるのである。⁷⁾

一方, フローレンス = クラックホーン (Florence Kluckhohn) は, 価値志向を「複合的だが明確な型をもった (秩序だてられた) 諸原理であって, それは, 評価過程の三つの分析的に識別し得る要素——認知的, 情緒的そして方向的要素——の統合的な相互作用 (transactional interplay) から結果したもので, 一般的な人間の諸問題の解決に関わることによって, 人間の行為や思考の限りない流れに秩序と方向を与えるものである」と定義している。⁸⁾ 彼女は価値志向の五つの類型として次のようなものをあげる。⁹⁾

- (1)人間の本性に関する志向 (Human Nature Orientation)
- (2)人間と自然 (超自然)に関する志向 (Man-Nature(-Supernature) Orientation)
- (3)時間に関する志向 (Time Orientation)
- (4)活動性に関する志向 (Activity Orientation)
- (5)人間の結合関係に関する志向 (Relational Orientation)

この五つの志向は夫々三つの変異型をもつとされる。

即ち、

- (1)人間の本性については、それを悪とみるか善悪の混合 (又は中性) とみるか、それとも善とみるかで三つに分れる。そして夫々三つの範疇は、変化するか不変かによって二つに分たれる。
- (2)人間-自然の関係については、自然への服従、自然との調和、自然の征服の三つの見方に分れる。
- (3)時間志向は、過去、現在、未来のいずれに目を向けているかに分れる。
- (4)活動性については、ありのままにあるべきか (Being)、発展的であるべきか (Being in Becoming) 行動的であるべきか (Doing) の三つに分れる。
- (5)人間の結合関係については、直系的 (Lineality)、傍系的 (Collaterality)、個人主義的 (Individualism) のいずれであるべきかによって分れる。

この五つの問題は、クラックホーン、F.によれば、人間一般に共通した基本的問題であって、このような問題に如何に対処するか、又はこのような問題に如何なる解決を与えているかによって、個人又は集団の基本的な価値に対する態度 (価値志向) が特徴的に表われるとされるのである。

3) さて、パーソンズは行為者の動機志向の三様式と対応させて、文化的志向 (文化型) を三つの体系に分析している¹⁰ 文化的志向は動機志向の夫々のタイプの志向上の問題解決の仕方を記号の体系という形で示しているものと考えられる。彼の分類する文化の三つの体系とは

- (A)認知的記号の体系 (観念もしくは信念の体系)
- (B)表現的記号の体系
- (C)評価的記号の体系 (価値志向の基準)

であった。そして(C)の評価的記号の体系は、

- (a)認知的基準の体系 (subsystem of standards for solving cognitive problems)
- (b)鑑賞的基準の体系 (subsystem of standards

for solving cathectic or appreciative problems)

(c)道徳的基準の体系 (subsystem of moral standards)

という三つの下位体系に分れる。(A)(B)(C)に対応する動機志向の諸様式は、

- (A)' 認知的様式 (cognitive mode)
- (B)' カセクシスの様式 (cathectic mode)
- (C)' 評価的様式 (evaluative mode)

である。文化的志向の夫々は、(A)' に対して(A)は認知する仕方、(B)' に対して(B)はカセクシスの注ぎ方、そして(C)' には対して(C)は評価の仕方を示しているものといえる。即ち、(A)は認識上の諸問題の解決、(B)は感情を如何にして表現するかという問題の解決、(C)は評価上の問題の解決を示しているのである。(C)の評価上の問題の解決にあたっては、(a)(b)(c)は夫々、認知的、鑑賞的、そして道徳的な判断の基準となる。文化の諸体系のうちで、行為体系にとって特に重要な意味を有しているのは(C)評価的記号の体系であり、さらにその中の(C)道徳的基準が、相互作用の仕方にかかわる社会・文化体系の特徴的な価値を規定している。

(C)の道徳的価値基準は、行為体系全体の統合にかかわる基準である。それは、カセクシスの充足や、認知的行為の許容され得る限界を規定するという意味から、(A)(B)の夫々の部門を総合している。なぜなら、(B)はカセクシスの注ぎ方を示している文化的志向であるが、その客体は別の諸客体との関係においてカセクシスを注かれるべきかどうかについての評価を受けている。一方、(A)は状況認知の仕方についての文化的志向の型なのだが、認知された客体は他の客体とのカセクシスの愛着の比重にもとづいて評価されている。つまり、行為主体は一個の客体そのものを直接に認知したりカセクシスを注いだりするというより、評価的志向の示す方向に従って認知しカセクシスを注ぐのである。この意味で(C)は(A)(B)の総合をあらわしているものであり、その中でも(C)の道徳的基準は社会的相互作用の仕方を規定するものであり、全体の頂点に位置するものといえるのである。

換言すれば、それは社会的行為の選択状況において諸選択肢からの選択の仕方の定った型を示すものである。この選択の仕方(即ち、社会的相互作用の型)こそ特定の社会集団ないしはその成員を他の社会集団やその成員から区別し特徴づけるものなのである。文化体系における選択方向を規定する価値(志向)の型は、社会体系の中に

内面化されて制度化された役割となり、パーソナリティに内面化されると欲求性向の一部となる。クラックホーン, C の価値定義によれば、価値とは行為の選択状況において影響を与えるもので、それは「個人に特有的な又は集団に特徴的な概念」である。¹¹⁾この定義を裏がえせば、特定の価値の型が集団や個人を特徴づけているものともいえるのである。

パーソンズらは文化を上記のような三側面を有するものとして分析しているのであるが、これは文化の中から価値の要素を、その中でもとりわけ道徳的価値の要素を取出してこれを浮彫りにしたものとえよう。文化型のうち、特に特定社会の特徴とかかわりを有しているのは価値志向の型である。なぜなら、認識の仕方やカセクシスの注ぎ方を示す認知的、表現的な側面は評価的側面の支配下にあるのであり、従って又、認識上の判断、表現上の判断の基準となる認知的基準、鑑賞的基準は夫々道徳的基準から自由ではあり得ない。しかし、科学的技術や芸術的表現にみるように、認知的、表現的な側面は、道徳的側面と較べると、純粋に実在的かつ非規範的な様相が強いものである。

クラックホーン, C. は、文化的要素はすべて選択的性質をもっているが、そのうち望ましいという概念にもとづいた選択性を示すのが価値であるとしている。¹²⁾例えば、英国におけるアメリカ人はイギリス式でなくアメリカ方式でナイフやフォークを扱うし、アメリカに住む中国人女性はしばしば中国様式の服を着用している。これらは望ましいという観念は含まなくとも、意識された選択を内包している文化的に規定された行動である。さらに、「売春」はある文化では承認された行動型であっても、人々によって望ましいものと考えられていない限りで価値ではないし、現代アメリカにおける「成功」という theme も今日では多くのアメリカ人によって価値かどうか疑問視されているという。

4) ところで、パーソンズらの行為理論の中で提出されている型の変数 (Pattern variables) は、このような価値志向の型の類型表をあらわしているものと考えられる。¹³⁾型の変数のもつ第一次的な意味として、それは行為の選択的状況において行為者がさしあたって行わねばならない二者択一的な選択の内容を示したものである。行為者は状況が彼にとって明確な意味をもつ以前に一連の選択を迫られる。その選択とは次のようなものである。

まず第一に、動機志向の認知的、カセクシスの様式によって把握された客体から充足を受取るべきかについて、

評価の様式の裁断をおおぐべきか否かというディレンマが生ずる。第二に、評価の様式が作用するとしたら、社会体系ないしはその下位体系の道徳的基準に優位を与えるべきか否かの選択を行わねばならない。第三は、認知的基準と鑑賞的基準のいずれに主として従って客体に対処するかという問題である。認知的基準が優越する場合には行為者はある一般化された関係性によって諸客体を配置するであろうし、鑑賞的基準が優位を占める場合には彼は自分自身の動機とのかかわりありあいによって諸客体を配置する。第四番目に、所与の選択状況において行為者は客体をどのように取扱うべきかというディレンマに直面する。客体はそれ自体何であるか、ないしはそれが何をなしそこから何が生ずるかということ、つまり客体の所属と業績のうちいずれに焦点をあわせるべきかという問題である。そして第五番目は、行為者が関与する客体の範囲を制限しないか又は制限すべきであるかということに関しての二者択一の問題である。以上の五組の選択肢は次のような名称を与えられる。

即ち、

- (1)感情性—感情中立性 (Affectivity—Affective neutrality).
- (2)自己中心志向—集合体中心志向 (Self—orientation—Collectivity—orientation)
- (3)普遍主義—個別主義 (Universalism—Particularism)
- (4)所属本位—業績本位 (Ascription—Achievement)
- (5)限定性—無限定性 (Specificity—Diffuseness)

である。(1)は評価の様式の発動をみるべき(感情中立性)か否かについての二者択一。(2)は評価の際に道徳的基準に優位を与える(集合体中心志向)べきか否かにかかわる選択肢。(3)は認知的基準に相対的な優位を与える(普遍主義)べきか、鑑賞的基準に優位を与える(個別主義)べきかという選択肢。(4)は客体をその性能の側面からながめる(所属本位)か、あるいは客体の成就ないしはそれらの結果という面からながめる(業績本位)かについての選択肢。(5)は客体の意味を特定範囲に限るべき(限定性)か、限らざるべき(無限定性)かにかかわる選択肢である。

さて、この型の変数は、行為者が行為するに際してのさしあたっての選択内容を示すものであると同時に、三つのレベルの行為の関係性の説明に適用される。まず第一にそれはパーソナリティの選択の習慣を説明するものとして用いられる。個人はこれら五組のディレンマのうちの方々の一方を、常に、あるいは特定状況下で選ぶとい

う一連の習慣をもつ。次にこの型の変数は、社会体系の役割の定義（即ち集団成員の権利と義務の定義）の説明に用いられる。社会体系の役割の定義は、役割当事者が行う行為の選択的方向を指定している。そして最後に、この型の変数は文化の評価の基準（価値志向の基準）を説明する変数としても扱われるのである。換言すれば、型の変数は、個々の選択的行為を説明するだけでなく、パーソナリティの価値基準、社会体系の役割を定義する価値基準、そして文化型に記号として表わされている価値基準の夫々を共通のタームで説明しているのである。そしてこのような価値基準は、具体的行為においてみられる選択の一貫性から推論されるものなのである。

型の変数は、かくしてパーソナリティ、社会体系、文化という三つのレベルでの価値志向を記述する際のカテゴリーとして用いられる。即ち、形の変数は文化的な価値志向の型を描いたものであると同時に、文化の価値がパーソナリティと社会体系において具現されるという意味において、それは個人的及び社会的な価値志向をあらわす範疇でもあるのである。

では、型の変数は三つの体系——文化、パーソナリティそして社会体系——の夫々において如何なる意味をもつのであろうか。それは文化の規範型、パーソナリティの欲求性向、そして社会体系の役割期待の夫々に即して敘述される。¹⁴⁾例えば、(1)感情性—感情中立性という二分的な価値志向の色分けについて、三つの体系は夫々どのようなかわりをもつか。この選択肢があらわしているのは、特定の状況で衝動を解放するほうが望ましいとするか（感情性）、それとも欲求を抑制して評価的な考慮に優位を与えるのが望ましいとするか（感情中立性）、という二つの対立する価値志向の類型である。

文化のレベルにおいては、それは評価的な考慮にとらわれずに与えられた即時的充足に身をまかすことを認める感情性的な規範型(normative pattern)としてあらわれるか、それとも欲求の即時的充足を抑制して評価的考慮におもむくべきであるとする感情中立的な規範型としてあらわれる。パーソナリティのレベルにおいては、即時的充足に身をまかすことを行為者が自ら許す感情性的な欲求性向(need-disposition)としてあらわれるか、又は即時的欲求充足を抑えて評価的考慮に向わんとする感情中立的な欲求性向としてあらわれる。そして社会体系のレベルでは、役割当事者の情動的反応を自由に表現することを規制しない感情性的な役割期待(role-expectation)としてあらわれるか、又は役割当事者の一定の情動的反応を抑制しそれに規律を与えんとする感情中立

的な役割期待としてあらわれる。このように感情性—感情中立性という価値志向の範疇は文化の規範型、パーソナリティの欲求性向、そして社会体系の役割期待の三つを縦に貫ぬいて、これらを二分的に素描するのである。

5) そこで、次には文化、パーソナリティ、社会体系という三つの体系の夫々が共通の価値志向によって接合されるメカニズムについて問われなければならない。¹⁵⁾まず3つの基本的な体系は、記号の体系たる文化と、行為体系であるパーソナリティと社会体系とに区別される。文化体系は型として統合されているが、行為体系は機能的に統合されている。文化体系は、その諸成分が機能的な関連性をもってまとまっているというよりも、論理的ないしは意味上の一貫性のもとに統合されているのである。そして、それは行為体系の志向の客体として存在すると共に、行為体系の内部に取込まれて志向の要素ともなる一方、パーソナリティ体系は、一個の行為する有機体の行為志向とこれにともなう動機づけの過程が一つの分化し統一された体系となったもので、それは一個の有機体の生命の過程をめぐって組織されている体系である。これに対して、社会体系は複雑な人間の行う社会的相互行為(interaction)によって生じた新しい秩序によって組織された体系である。社会体系の単位は、個々の有機体としての人間というよりも、彼らが社会体系の中で行う役割であるとされる。

ところで、人間有機体は身体から発する欲求以外に社会関係に対するある種の欲求を有している。人間は「社会的客体」即ち他の人間に対して反応する素質的な能力を有している。彼は、社会的客体に満足したりそれによって欲求阻害を生ぜしめられたりすることにより、複雑な欲求——即ち欲求性向——を発達させてゆく。社会的相互行為の場において、人間はお互に他者の行為に対して一定の期待を抱いており、その期待にもとづいて他者の行為に肯定的ないしは否定的な反作用を行う。人間の欲求性向は、このような反作用によって充足されたり阻害されたりするために、一定のタイプの反作用に向う欲求性向が発達させられる。一方、社会体系はその機能的統合を目差して一定の相互行為の仕方を定めているのだが、それに基づいて集団内部の成員は、相互の行為に対して役割期待を抱く。従って、パーソナリティの欲求性向と社会体系の役割期待とは、お互いに関連しあっており相互依存である。パーソナリティの欲求性向は社会的相互行為における他者の反作用によって充足されたり阻害されたりしつつ、社会体系の役割期待にあわせて発達

するのであるが、翻って、社会体系の役割期待はこのようにして形成された欲求性向によって支えられている。役割期待は、社会的相互行為の体系を形成するのだが、それは一定の選択的志向の定った型を示すものであるといえよう。そして社会体系の構造的な特徴は、この選択的志向の型によってあらわれるとされるのである。他方、文化的志向の諸要素のうちで、評価的記号の体系は以上のような選択的志向の型を規定しているものである。この評価的記号の体系（価値志向の体系）のうちでも、特に道徳的基準は社会的相互作用における評価上の問題の解決を規定したものである。即ち、文化の道徳的基準は、役割期待と sanction を構成するようになる相互的な権利と義務の型を規定しているのである。

文化型のうちの価値志向の型が、パーソナリティや社会体系に内面化されるときに、それは個人的価値や集団的価値となる。つまり、文化の選択的志向の型（価値志向の型）はパーソナリティに内面化されて欲求性向の一部となり、社会体系に内面化されると制度化された役割期待となる。この過程が十分に達成されると、文化、パーソナリティ及び社会体系の「三者の相互的な統合が全き円形を描く」¹⁶⁾のである。

しかしながら、文化の規定する価値志向、個人の価値志向、そして社会集団の価値志向は、夫々お互いに常に合致するわけではない。その食違いはどのようにして生ずるかといえば、まず型として統合されている文化体系と機能的に統合されている行為体系との本質的な相違が考えられるであろう。文化の諸要素は論理的な首尾一貫性の下に統合されて一個の体系を形成していると考えられるのであるが、そのような文化的志向の型は具体的な行為の状況にそのまま通用するわけではない。具体的状況において実践する行為体系は、自己の体系の統合を全うするために、客観的状況の要請に従って文化的な価値志向の型を再解釈したり変形したりする必要に迫られるであろう。次に考えられるのは、パーソナリティと社会体系との機能的統合の内容上の相違である。パーソンズによれば、社会体系の機能的命令の第一のものは「秩序」(order)であり、パーソナリティ体系の機能的要請の第一は「充足」(gratification)であるという。¹⁷⁾ここから個人的価値と集団的価値との相違が生じてくるのだともいえよう。さらに複雑に分化した社会にあっては、社会体系相互間の価値の葛藤も考えられなければならない。このような社会では、包括的な社会体系（パーソンズらが society とよんでいる社会体系）の価値とその下位体系である諸々の社会集団の価値との葛藤、さらに下位体系

相互間の価値の葛藤が考えられるのである。

6) ここで、体系の統合ということと並行して価値ないしは価値志向の統合という問題が考えられるが、その際に「価値体系」という概念を導入するのが適切であろうと思われる。¹⁸⁾価値体系という概念の成立をみるためには、価値、価値志向が個々にまとまりなく存在するのではなく、独自の構造と様式をもち基本的な原理によって統合されていることが前提となる。文化、パーソナリティ、そして社会集団が、夫々一つのまとまりをもった体系である以上、その内部に位置する諸価値は何らかの原理の下に統合されていると考えられる。クラックホーン、C. は、価値の本質的な性質の一つは価値が差別的に作用するということだと述べているが、価値相互間に差別が存在するという事は、何らかの形で価値の hierarchy が存在していることに他ならない。¹⁹⁾アバーレ (Aberle D. F.) は、価値体系を論理的、意味的かつ情緒的な一貫性をもつところの諸々の価値のセットであると説明している。²⁰⁾確かに、我々の行為が物理的、生物本能的な一連の衝動への反応でないとするなら、その行為の一貫性の傾向を決定するところの一定の原理を設定することは不当ではないと思われる。

しかし、複雑に分化した社会体系では、文化的な目標と制度化された諸手段との間に様々な不適応状態が存在しており、統一的な価値体系を仮定することは必ずしも容易ではないであろう。従って、「比較的孤立しており調和のとれた共通の統一的な価値図式を有しており、制度化された諸手段が望ましい目標を与えている」²¹⁾ような社会集団ほど、価値体系は明確な体系として把握することが出来るといえよう。例えば、アルバート (Albert, E. M.) は、Navaho の価値体系を次のような五つのカテゴリーを hierarchy 状に配列することによって示している。²²⁾即ち、

- (1) 価値前提 (value premises)
- (2) 焦点価値 (focul values)
- (3) 指示 (directives)
- (4) 特性 (character)
- (5) 価値付与された、ないしは逆評価を受けた諸々の実在物 (valued and disvalued entities)

である。これらは(1)→(5)へと hierarchy 状に配列され、そのうち(3)と(4)が同じレベルに並べられる。頂点に立つのが(1)価値前提であり、これは最も一般的な Navaho の価値を規定したもので、価値志向はここに含まれる。(2)焦点価値は一群の諸価値から推論される中心的な価値で

ある。(3)指示はNavaho社会内部で為すことと為すべきでないことを定めたもので、これは規定 (prescriptions) と禁止 (prohibitions) とに分れる。(4)特性とは人間の性格に関する価値を定めたもので、徳 (virtues) と悪徳 (vices) とに分れる。そして(5)は最も一般性の低い数多くの多様な価値を具体的に表わしたもので、これも価値あるもの (valued) と反価値的なもの (disvalued) とに分れる。この価値体系の頂点にある価値前提、価値志向ないしは焦点価値が、Navaho社会にとって最も基本的かつ一般的であり、それ故にこれらによって Navaho社会が他の文化や社会と特徴的に区別されるというのである。

以上のアルバートの描く Navaho文化の価値体系は、あくまで観察者の視点から推論にもとづいて構成されたものであり、Navahoの各成員がこのような明確な図式を念頭において生活しているわけではない。彼らは夫々個人的な価値体系を自己の内に抱いていると考えられる。即ち、各成員は状況の機能的な要請に従って自己の価値体系を組み立てているのであるが、その際に彼らの価値体系は社会又は文化の価値体系の一種の変異型であるといえるのである。

7) 人間、文化、自然、社会の統合の過程は、継続的かつ相互重層的な調整 (Regelung)、形成 (Prägung)、不安定化 (Labilisierung) といった止まるところのない一つの過程であるといわれる。²³⁾特に、現代のように様々の社会階層や全体社会や文化が夫々集合して出会い、重なり合っている状況では、価値、価値体系の多くは決して一定不変のものではあり得ないだろう。個人の価値も、社会体系の価値も、そして文化の価値さえもが、絶えず変容の機会に直面しているのである。

〔註〕

- 1)本誌、拙稿「価値の社会学的考察(Ⅱ)―行為と価値」の(6)を参照。
- 2)クラックホーン、C.は8つの次元を設けることによって価値の分類を試みているが、そのうちの1つがここで取上げた「広がり次元」である。ちなみに、8つの次元とは、
 - (1)様相の次元 (dimension of modality)
 - (2)内容の次元 (dimension of content)
 - (3)目的性の次元 (dimension of intent)
 - (4)強さの次元 (dimension of intensity)
 - (5)一般性の次元 (dimension of generality)
 - (6)顕示性の次元 (dimension of explicitness)

(7)広がり次元 (dimension of extent)

(8)組織性の次元 (dimension of organization) である。

(8)の組織性の次元という視点から価値を観察したときに、本論文後段で言及する「価値体系」という概念が出てくるのである。

3)パーソンズも普遍的価値の存在を認める立場であるといえよう。後に述べるように彼の行為理論における型の変数 (pattern variables) は、文化的価値の体系的な分析を試みたものである。

4) Kluckhohn, C.; "Values and Value-Orientations in the Theory of Action: An Exploration in Definition and Classification," in Parsons T. and Shils, E. A. (ed), *Toward a General Theory of Action*, p.409.

5) *ibid.*, p.411.

6) Parsons, T. and Shils, E. A. (ed); *Toward a General Theory of Action*, p.170.

7)「価値志向」という概念は、「特定の価値へ心に向けること」の意であって、それは1つの心的な過程を意味するものと考えられる。しかし、クラックホーン、C.の用法では、それは基本的な価値をあらわす概念として用いられており、又クラックホーン、F.の用法では「特定の(基本的な)価値に対する態度」を意味するものと解せられる。だが、これらの用法の夫々にみられる「価値志向」という語句の解釈の仕方は、本質的には矛盾していないものと思われる。

8) Kluckhohn, F. R. and Strodtbeck, F. L. : "Variations in Value Orientations," p.4.

9) *ibid.*, pp.10~20.

10) Parsons, T. and Shils, E. A. (ed), *op. cit.*, pp.162~175.

11)本誌の¹⁾参照

12) Kluckhohn, C., *op. cit.* p.422.

13) Parsons, T. and Shils, E. A. (ed), *op. cit.*, pp.77~88.

14) *ibid.*, pp.80~84.

15) *ibid.*, pp.6~27.

16) *ibid.*, p.26.

17) *ibid.*, p.180.

18)本誌の²⁾参照

19)例えば、我々は日常において「より美しい」「よりよい」「より適当な」という評語を用いる。こ

- のことは客体間の差別と同様に諸価値間の差別をも表わしているといえる。(Klueckhohn, C., op. cit., p. 420.)
- 20) Aberl, D. F. ; "Shared Values in Complex Societies", A. S. R. vol. 15, 1950. pp. 495~502.
- 21) Morgan, T. W. ; "Notes on Common Values and Social Control", S. F. vol 27. 1948. pp. 418~421.
- 22) Albart, E. M. ; "The Classification of Values : A method and Illustration", Amer. Anthropologist, vol. 58, 1956, pp. 224~226.
- 23) Wurzbacher, G., ; „ Sozialization—Enkulturation—Personalisation,“ in Wurzbacher, G. (Hrsg.), Der Mensch als soziales und personales Wesen, SS. 28~30.

(昭和42年9月10日 受理)